

2024 年度 中央大学国際経営学部

自己推薦入学試験

筆記試験（小論文）問題用紙

【注意】

- ・机の上に置けるものは、受験票とシャープペンシル、鉛筆、鉛筆削り、消しゴム、通信機能が搭載されていない時計のみです。
- ・試験監督の指示があるまで、問題用紙を開かないでください。
- ・解答は、すべて解答用紙に記入してください。
- ・試験終了後は、解答用紙のみ提出してください。

次の文章を読んで、以下の問いに答えよ。

社会科学の各分野において、数字や数式を用いて議論を進めることは、近頃ますます盛んになりつつある。

ウィリアム・ペティは「政治算術」の中でいっている、「単に比較級や最上級の言葉を使用したり、また思弁的な議論をする代わりに、わたしのいおうとするところを数と重量と尺度によって表現するという方法」は「感覚に訴えることのできる議論のみを用い、また自然の中に実現しうる基礎を持つような諸原因のみを考察する方法であって、個々人の移り気や好みや感情に左右されることではない」。

ペティが「政治算術」を書いた 17 世紀後半とは違って、現在では、このような方法は、「いまのところでは、あまりありふれたものではない」どころか毎日の新聞雑誌から、選挙演説に至るまで、きわめてありふれたものになっている。

しかしながら逆に数字や量的な尺度を用いることによって、議論に見せかけ上の正確さを与えて、人を誤らせる危険もまた決して少ないこともわれわれが日常経験しているところである。従って「数と量と尺度とを用いる方法」、すなわち数量的認識方法、の意味と限界とを吟味してみることも、現在では極めて重要な課題であると思われる。

数量的認識方法は、近代社会において、人々の考え方にいろいろな影響を及ぼした。それは一部は人々の考え方の変化の結果であり、また逆にそれが考え方の変化をもたらした面もある。その因果関係を確定することは困難であるが、結果として次のような変化を生じたといっていよいであろう。

全ての現象、対象を質的なカテゴリーの相違ないし対立の観点からではなく、本質的に同質的なものの量の差として理解しようとする事、一見質の差が見られる場合でも、その背後にそれを量の差に還元するような実体を求めることがつねに試みられる。色の差は、光の電磁波の波長の差という量に還元され、化学元素の違いも、原子量の差に帰着させられる。そのことが、個別的な質の差に対する無関心、無視を生み出している。質の差は、主観的なものとして“客観的”な議論の枠外にあるものとされてしまう。

そのことは、社会的現象、あるいは人間にも及ぶ。人間は形式的には全て同質のものに見なされ、身体的あるいは心的計測の結果に表れる数量的な差異のみが現実のものとなる。また人間および社会的組織は、その人間の作り出した客観的な“結果”によってのみ評価されることになる。

このことは、人間を前近代的な出生、宗教等々に基づく非合理的な差別から自由にするという意味では、人間の平等と解放をもたらしたが、同時にそれは人間の個別性への無関心を生み出し、人間の主体性への無理解を生じている。全ての人間はそれぞれ個人としては、自分自身にとってかけがえのない存在であり 身長や体重や、IQ 指数や、所得や資産やといった数字をいくら並べても、それは自分ではないということが忘れられてしまう。

量の論理は、少なくとも“さしあたって”は価値の問題を棚上げにする。何が正しいか、何

が人間にとって良いことであるかということは客観的に計測できることではない。従って、とにかくそのような問題は別として、計測可能な量的側面だけを取り上げようということになる。

しかし“価値”の問題は、少なくとも客観性あるいは形式的合理性を超越した面をふくんでいる。“客観的”にいえば、人間が個人としても人類全体としても、宇宙全体の空間的・時間的拡がりの中では無に等しいということは否定しようのない事実である。従って量的な拡がりの観点で考える限り、人間の“価値”ということは本来矛盾である。個人としても集団としても人間の“価値”は自分自身の占めている時間・空間の中の一点がかけがえのないものとし、そこに固執することによってはじめて生じてくるものである。またそういう意味では、逆に人間の“価値”は人間の有限性に基礎を置いている。“価値”は特定の間、特定の現象、特定の行為にかかわるものであり、それが意味を用いるのは、実は人間が全体としても、個人としても有限の大きさを持ったにすぎないからである。もしそうでなければ、いかなる特定の物事も全体の中ではゼロということになってしまうであろう。従って無限の拡がりを前提にしている量の論理と、人間の“価値”の間には、本質的に矛盾があるといわねばならない。従って量の論理において、“しばらく価値の問題をカッコに入れておく”ことにしても、そのカッコを外すことは、なかなか困難である。結局、とにかく大きいことはよいことだ、という最も卑近な考え方に陥ってしまうことになりやすい。

従って現在何よりも必要なことは、まず、質の観点、価値の観点、意味の観点をとりもどすこと、きわめて限られた限界を持ちながら、同時にそれぞれ各人にとっては他にかけがえのないものである主体的個人の立場から、量的拡大の論理を批判的に吟味することでなければならない。

このことは決して前近代的な非合理性への回帰を主張するわけでもなければ、量の論理に対するやみくもの反抗を進めようというものでもない。現在なすべきことは、このような問題意識に立ちつつ、量的拡大あるいは量の論理に限界があることを、量的に示すことでなければならないと思う。そのような量によって量を批判する学問をわたしは「新政治算術」と名付けたいと思う。ウィリアム・ベティの政治算術が量によって量的拡大ということが可能でもあり必然でもあることを示すことを目的にしたとすれば、新政治算術は量的拡大に限界があり、その限界は早晚現実のものとはならねばならないことを示そうとするものである。

(出典：竹内啓 (1971)「社会科学における数と量」東京大学出版会。一部改変。)

問1 筆者の考える数量的認識方法の利点および欠点を 80 字以内で述べよ。

問2 量的な拡がりの観点で考える限り、人間の“価値”ということは本来矛盾である、のはなぜかを 80 字以内で説明せよ。

問3 この文章は50年以上前に書かれたものである。半世紀後の現在、あなたはこの文章に対してどう思うか。賛成または反対を、あなたに関連する事例をあげながら800字以内で述べよ。